佳作

「生き方を教えてくれる人間ドック」

辻　基倫子さん

今から四半世紀ほど前、この国はバブル経済の只中で、誰もが正体不明な大きい夢に向かって我武者らにつき進んでいた。当時高校生だった私もその熱に浮かされ、「大学でとてつもなくスゴイ体験をして、世界に羽ばたくんだ。」と鼻息ばかり荒くして、勉強机の前に徒らに座っていた。私の母は、そんな私にいつも穏やかにこう言ってくれた。

「お父さんもお母さんも一生懸命働くから、お前は東京でも、どこでも好きな所の大学に行っていいんだよ。」

私の両親は、パン屋である。朝まだ暗いうちから仕込みを始め、自分のご飯を食べる暇も無く働いた。家中が、「今が稼ぎ時だ。」とばかりに、目の前の仕事に機械のように打ち込んだ。そんな毎日に黄信号がついたのは、ある暑い夏の夜のことだ。母は鏡に向かい、自分の喉の辺りを抑えながら、私に言った。「なんだか、喉のこのへんに、コリコリしたものがあるのよねえ。変だよね。どう思う。」私もその変なものに触ってみた。確かに、私の喉には無い、小指くらいの突起物が母の喉にあるのがわかった。私は無性に心配になり痛みや体に不調が無いか尋ねた。すると母は、「それは無いの。ひょっとして癌かしら。」〝癌〟という言葉をひどくお道化て言って笑った。その様子を見て私も何だか安心し、一緒に笑ってやり過ごしてしまった。

情報弱者。あの頃の私と母はまさにこれだ。毎日の忙しさに感けて市の広報誌すら見ていなかった母は、人間ドックを定期的に受けられるシステムを知らなかったのだ。まだインターネットも無かった時代、健康で病院にも全く行かなかった私も、総合病院で設けられている人間ドックの存在に気付かなかった。私も母も、心の中に熾火のように燻り続ける不安を見過し、「きっと大丈夫だろう」と、楽観を決めこんで、その暗い思いに蓋をしてしまったのだ。

それから五年後、バブル経済は崩壊し、日本中が夢から醒め、商いの規模を小さくし始めた頃、我が家でも店を建て直し、これからの地域の状況に合わせた造りにすることになった。工事の間、約半年ほど仕事の無くなった母と向かい合った時、心の中で燻っていた黒い不安が俄に燃え上がるのを感じた。母の顔は土気色に細くとがり、喉の異物は外から見ても、よくわかるほど大きくなっていたのだ。その頃は社会人として勤め始め、人間ドックがどこでどのように行われているのか調べることが出来た私は、すぐに検診を受けさせてくれる病院を見つけ出した。私は母に向かって、何をおいても、すぐに人間ドックに入り、体中をしっかりチェックしてもらうよう、断固として言った。

こうして母は生涯で始めて家を二日間も空けて、全身の人間ドックを受けた。その結果は、案じていた通り深刻なものだった。喉の異物は甲状腺癌、他にも胃にただれがあり、肺には白い影があった。五十歳を過ぎるまで「私は丈夫だ。」と自分に言い聞かせて子どもの為、家業の為に働き続けた母だった。しかしその体は母に、「人間らしいいたわり」を求めていたのだ。

幸い喉の癌は転移が無く、外科手術も成功し、思いの他あっさりと回復に向かったのだが、母の顔色はさえないままだった。総合病院で、術後の定期検診を受けた後、私はふと思い立って人間ドックのカルテを内科で見てもらうことを提案した。私も母も、外出ついでのほんの軽い気持ちで受診したのだ。まさかそこで、人生の大いなる赤信号を見るとは。肺の影は癌だったのだ。私はショックのあまり、その告知を受けた瞬間にその場で倒れてしまった。母と手を握りあい、お互い支え合いながら病院を出た、あの時の苦しさは今でも忘れられない。

しかし、この告知は母の長い人生から見ると福音に近いものだった。人間ドックによる早期発見のおかげで、癌が進行する前に手術が出来、健康を回復することが出来たのだ。その後、母は定期的に検診を受け、癌の転移が無いことを確認し、安心の生活を送っている。現在は少々腰の曲がったお婆ちゃん店員としてパン屋の仕事に励んでいる。

母の病歴のことを振り返る時、人間ドックに救われた命だった、とつくづく思う。癌を発見する手立てになっただけでなく、その後の家族の生き方まで変えるきっかけとなったのだ。この一連の出来事が起こる前まで、私も家族も心

のどこかで「心身をいたわり、健康を保つ」ことよりも、休みなく心身を酷使することを「誠実な生き方」だと思っていた。しかし母の病気後、人間ドックや定期検診を生活の中に取り入れるようになり、「生身の人間」としての自分と向き合うようになったのである。生き物としての弱さも、立ち直る可能性も、人間ドックは教えてくれたのだ。